

TheSTYLE / Fashion & Design



加藤泉氏は着物をキャンパスに見立て、
「人型」モチーフを含むアートを友禅染の技法で描いた

現代の「絵師」も新しいキャンパスである着物を絵を描くという挑戦を通して、絵の本質をさらに追求した。まさに「絵」と着物である。

日本において、着物は儀礼的な服装とみなされがちで、さまざまな決まりごとや所作に縛られる「知らず」に着るのは失礼だというプレッシャーを伴い、「着物はこわい」と感じる場面も少なくない。しかし、本来、着物には喜びや楽しさを纏う服装としての側面がある。加藤氏は強調する。



外部から絵師を入れて新しい価値を創造することは着物の伝統にある、と語る千穂社長の加藤氏

千穂は創業470年を迎えた京友禅の老舗である。節目を記念して、現代美術家・加藤氏と共同制作した作品展「絵と着物 加藤泉×千穂」が開催されている。加藤氏の特徴的な「人型」をモチーフとした表現が、千穂が誇る友禅染の技法と掛けあい、アートをみるように着物を見る視点を提示している。

友禅染とは、江戸時代に誕生した染色技法である。扇絵師・友禅斎の岡州が起源とされ、布地に直接絵を描くように色彩を重ねることで、華やかで独創的な柄を生み出す。

その伝統的技法に挑む加藤氏は、オイルペインティング(油絵)を基礎としながらも、プラモデルの箱やソフトビニールといった多様な素材をキャンバスとして、常に新しい表現の可能性を探求している。現代美術家である。日本国内では日本画、西洋画といったカテゴリーに縛られることが多いが、国際舞台においては「絵」としての本質のみが問われる。加藤氏は語る。今回も絵として挑んだというが、さすがに着物に絵を描くのは加藤氏にとっても初めて挑戦となる。

着物にも似たところがある、と千穂社長の加藤氏は語る。日本国内では技法や作法でカテゴリー分けされがちだが、海外から見れば着物は着物(衣服)の一形態にすぎない。そのような世界の視点に立った「絵」と着物を融合させることで、着物の価値を問い直すことが今回の目的であるという。

着物には本来、創造的な思考や高度な職人技術が内包されているのに、それが伝統的製品はそういうもの、と見逃されてきた。アートとして見てもらうことで、着物の背景にある工程や独創的な発想、職人の存在に目を向けてもらうことを目指す。

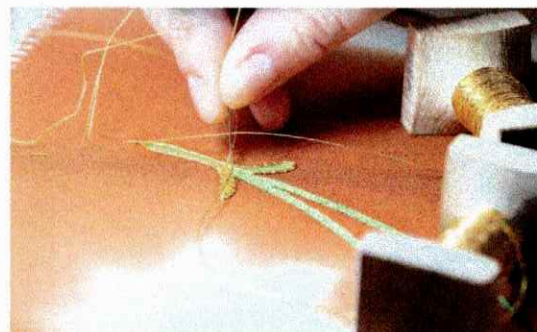
斬新なやり方に見えるが、加藤氏によれば、そうでもない。実はこのように外部から絵師を入れて新しい価値を創出するという実験的試みは、明治初期にも行っているのだ。

明治初期、政府によって洋装化が主導され、上流階級が次々と着物から洋服に切り替えていった。着物のデザイン自体も停滞していた時代だった。この機に千穂の12代目、西村總左衛門は、外部から絵師を招き入れるという試みに取り組む。

絵師は江戸時代には特権階級のバトロンをもち、海外の技法や美術動向の情報を豊富にもっていた。職人だけでは生み出し得ない発想をもち、絵師に学び、彼らの技法や斬新な感覚を友禅染の意匠に落とし込むことで、結果として、着物の表現の幅は広がった。絵師とのコラボによる改革の前例は、千穂の歴史にすでにあったのだ。



人型の「目」の部分にあしらわれるのは、伝統的な技法の「相良刺繍」。職人にとっても新しい挑戦となった



千穂の職人は日々、手作業で着物作りに取り組む。金糸を使った「金駒刺繍」を施しているところ

変化で着物需要が激減し、多くの職人が廃業した。その禍根はまだ続いている。着物文化が第2次世界大戦並みの「インパクト」をもって大きな危機にさらされている局面を受け、「この機を創造のチャンスに変えたい」と奮起し、挑んだのである。

共同制作の成果について、加藤氏は語る。「着物をアートとして見てもらうことで、通常の着物ではまず受けられないような取材も相次ぎ、着物の見られ方がそのものが変化し、同じ技法や素材なのに人々の反応が違った。現場の職人にとっても外部のアーティストによる刺激を与えられ、「着物とは何なのか」を再確認することで自信をもつことができた。

現代の「絵師」も新しいキャンパスである着物を絵を描くという挑戦を通して、絵の本質をさらに追求した。まさに「絵」と着物である。

日本において、着物は儀礼的な服装とみなされがちで、さまざまな決まりごとや所作に縛られる「知らず」に着るのは失礼だというプレッシャーを伴い、「着物はこわい」と感じる場面も少なくない。しかし、本来、着物には喜びや楽しさを纏う服装としての側面がある。加藤氏は強調する。

実際に、海外の人々は楽しさを求めて着物に興味を示している。ユーチューブでゲームを攻略するかのようになじり着物を着てくれる。あるいは、美しいから飾って楽しみたい」とアートとして扱ってくれる。着物に対するそんな

服師史家 中野香織
山田麻那美撮影

着物と絵の深い関係

